佛教文化学会十周年
北條賢三博士古稀 記念論文集 『インド学諸思想とその周延』 抜刷

2004年6月3日発行 山喜房佛書林

(415)－(432)

人類と死の起源

――リグヴェーダ創造讃歌 X72――

後　藤　敏　文

(415)

人類と死の起源 —リグヴェーダ創造讃歌 X 72—

後　藤　敏　文

リグヴェーダ（RV）には複数の創造説が見られるが，そのような主題の下に歌われた讃歌（Sūkta）として，特に，6編が有名である[1]：X 81.82（Viśvakarmaṇ），X 121（Hiraṇyagarbha），X 90（Puruṣa），X 129[2]，および，ここに取り上げるX 72（“Devāḥ”）である。人間の祖 Mārtāṇḍa の誕生が Āditya 神たちのサークル中で語られるこの讃歌には多くの研究・翻訳が論及するが，それらに関しては比較的最近の論文[3]に譲り，従来指摘されてこなかった事柄を中心に翻訳と注記とを提示したい。

1　*devā́nāṃ nú vayáṃ jā́nā*　　*prá vocāma vipanyáyā* |
　ukthéṣu śasyámāneṣu　　*yáḥ páśyād úttare yugé* ||

神々の（諸々の）生れを，今，我々は
公言しよう，昂揚の中に，
（以下に）言挙げされる（諸々の）讃辞の中に，
ひとがもし，（この）後の代（世）に見ることになるならば。

讃歌（Sūkta）の主題が提示される。Aorist 1人称複数形 *prá vocāma* は Konjunktiv（subjunctive）と考えるのが無難であり，[4] その場合，機能としては（現在の）意志（voluntativ「これから … するぞ」）が想定される。Medium 形ではないので，「…しようではないか」という呼びかけの意味には取り難い。同様の場面では，動作と同時に発語される場合（Koinzidenzfall）に用いられる Injunktiv が現れることも多いので，*prá vocāma* には Injunktiv の可能性もある。[5] その場合には「今，我々は［ここに］公言する」と訳される。

中性名詞 *jā́na-*（RV，AV，ŚB）は一般に「誕生，発生，出生場所」と解釈されているが，語形の形成法が一義的でなく，[6] 語義も完全には把握しきれない，例えば「生まれ方，素性」が意図されている可能性もある。

「昂揚の中に」と訳した *vipanyáyā* は語根 *vip*「がたがた震える」からの派生 *vipanyā́-* の Instrumental で，「がたがた震えることを伴って，…状態で」を意味し，RV の詩を「見る」（感得する）詩人（*kaví-*「見る人」，*ŕ̥ṣi-*「荒ぶれる者」[7]，*víp-*，*vípra-*「[興奮，昂揚に] 打ち震える者」）の精神昂揚・興奮状態を表わす。[8] そのような精神状態で祭官・詩人が「見た」ことばには，正しく発語された時に発現する実現力（*bráhmaṇ-*）[9] があり，真実（*satyá-*）[10] である。

yáḥ páśyād úttare yugé の解釈は一様ではない。*yáḥ* は単独で仮定をも含意し，「ひとがもし」と訳せる場合が多いが（konditional），[11] その場合には，以下に歌われる詩を予め念頭においての表現，または，視点を神々の誕生時において，その時点（過去）から見た未来（Konjunktiv 3 人称現在 *páśyāt* の機能は prospektiv）として表現しているものと考えられる。この場合には *úttare yugé*「後の世代に於いて」は，詩人たちの世代（今）を意味する。GELDNER 訳はこれに基づく。第二の可能性は *yáḥ* に final（目的節）の含意を想定し，「ひとが（誰かが）後の世（未来）に［この讃歌を］見る（目にする）ことになるように」と解釈することである。このような目的節の場合には *yád* が一般的であるが，*yáḥ* には更に「誰かが」の意味が込められていると説明することができる。HETTRICH（→ 注11）623 は *yá-* の含意に多様性を認め，この立場を取る：“damit sie（auch）einer im späteren Zeitalter（noch）erschaue”。FALK はこれに従う。ただし，*yá-* が final の機能を持つ例は他に挙げられていない。この場合には，Konjunktiv の機能は未来（prospektiv）とも話者の意志（voluntativ）とも解釈可能である。この解釈によれば，神代（創世の時）— 詩人たちが讃歌によって公言する今 — 讃歌を誰かが理解する未来，の 3 つの時代が考えられていることになる。[12]

2 *bráhmaṇas pátir etā́*[13] *sáṃ karmā́ra ivādhamat* |
devā́nām pūrvₗyé yugé *'ásataḥ sád ajāyata* ||

bráhmaṇ の主がこれらを
鍛冶屋のように溶融（鍛造）した。
神々の原初の代（世）に於いて，
非存在から存在が生まれた。

創造の第一段階が Imperfekt によって述べられる。Imperfekt は（遠い）過去を表現する場合に用いる代表的カテゴリーである。*saṃ-dhmā/dhamⁱ* は鍛冶屋の作業について用いられる動詞で，一般に「溶接する」と解釈されているが，[14] 本来，金属を得る精錬の為に「(坩堝(るつぼ)の中で原材料を）溶かし合わせる，完全に溶融する」を意味したものと思われる。[15] 古インドアーリヤ語では，一連の作業の中，始めの特色的な行作を意味する単語によって，引き続く全作業工程を表す語法が発達しているので，[16]「溶かし合わせる，完全に溶融する」によって鍛冶仕事の全行程が含意されていると解釈すべきであろう。「これらを」（→ 注13）の指示する内容は，1a に述べられた *jā́nā*「神々の（諸々の）生れ」，または，「これら（皆の知っている）この現に存在するものたち（一般)」と考えられるが，讃歌全体の文脈中では，後者の方が自然に思われる。[17]

溶融・鍛造によって世界を創った創造主が *Bráhmaṇaspáti-*「*bráhmaṇ-* の主」，即ち祭官たちを祭官たらしめている力，正しく形づくられたことばが正しく発語された時に働く「ことばの実現力」（→ 注９）を司る神である，ということは，祭官たちの用いることばがこれら現実の諸存在を溶融・鍛造したことになる。背景には「ことばによる創造」という観念の存在が想定される。[18]

cd は「ことばによる諸存在の溶融・鍛造」を「非存在からの存在の誕生」と具体的に「解き明かし」ている。このような，詩節（ṛc）の前半（ab）と後半（cd）との関係は，この讃歌全体に一貫して見られる。即ち，2cd 以降には，前詩節の cd の内容を受けて ab に繰り返し，cd を繋げる，という鎖型の構成が顕著である（2−3，3−4，4−5；6〜7，8〜9)。従って，2ab は既知のテーゼを先ず呈示したものであり，2cd 以降がこの讃歌の本領，つまり，2ab を歌い（解き）接いで展開された部分ではないかと考えられる。2cd 以降に述べられる創造過程

が誕生説によるものである点も，これと符合する。*ajāyata*「生まれた，産まれた」は，2cd，3abまでは，特に生殖によらない一般的な表現とする解釈を許容するが，3cdに至って出産を謂うことが明確に打ち出される。

このような仮定に立った場合，2abの「ことばによる溶融・鍛造説」は，そもそも，Viśvakarmaṇに向けられた創造讃歌X 81を念頭に置いているのではないか，という問いが提起される。即ち，同讃歌においては，Ṛṣiであり，祭官たちの父であり，Hotarとして座を占めた（1b：*yáḥ... ṛ́ṣir hótā ni̯y ásīdat pitā́ naḥ*）Viśvakarmaṇ「すべてを作る者」には，「祭官のことば」という性格が明瞭に賦されており，最終第7歌では*vācás páti-*「ことばの主」と呼ばれている。溶融・鍛造はその第3歌に述べられる：X 81,3 *viśvátaścakṣur utá viśvátomukho* ˡ *viśvátobāhur utá viśvátaspāt* | *sám bāhúbhyāṃ dhámati sám pátatrair* ˡ *dyā́vābhū́mī janáyan devá ékaḥ*「[彼は] あらゆる方向に視覚をもち，また，あらゆる方向に顔（口）をもつ，あらゆる方向に腕をもち，また，あらゆる方向に足をもつ。[彼は] 両腕によって，溶融・鍛造する，翼たち（風を送り込む為の道具，→注15）によって [溶融・鍛造する]，唯一の神として，天と地とを生み作りながら」。この*janáyan*「生み作りながら」を根拠に，X 72の詩人たちは生殖・出産説へと転換し，自説を展開したという可能性が考えられる。また，同詩節の*viśvátas-pad-*「あらゆる方向に足をもつ」も，X 72,3d *uttānά-pad-*「足（の裏）を上向きに拡げた」の基に意識されていた可能性がある。要するに，X 72はX 81を前提とし，これに対抗してĀditya神たちのサークルの中で独自の創造説（母からの創造）を打ち出した，と考えるべきことが示唆される。

3 *devā́nāṃ yugé prathamé* *'ásataḥ sád ajāyata* |
tád ā́śā ánv ajāyanta *tád uttānápadas pári* ||

神々の最初の代（世）に於いて，
非存在から存在が生まれた。
それに引き続き，（諸々の）領域が生まれた。

その際，足（足の裏）を上向きに広げた者から。

第2歌の後半を殆どそのまま受けて，更に，世界創造の第二段階，領域・空間の発生が語られる。第2歌から第5歌までは，先行する歌の後半部を受けて，前半部を歌い，これに新たな後半部を付ける，という形式をとっている（この構造は，6以下でも，それほど直接的ではないが，基本的には踏襲されている）。4人の学者・詩人による「尻取り連歌形式」を用いて（あるいは，その形式に仮託して）神々の誕生までを歌ったものと考えると，構造が無理なく理解できる。[19]

Falk は *uttānā́-* の用例を詳しく検討して，*uttānápad-* を「足（の裏）を上向きに拡げた」と解し，Thieme 等が主張する，跪いてするお産の姿，とする説を否定して，「逆向きの者（空間）から再びそれ（存在）が［生じた］」と解釈する。しかし，*uttānápad-* の意味はそう理解すべきであるとしても，[20] また，どのような姿勢でお産が為されたにしても，出産を意図することを否定するものではない。2d で提起された *ajāyata*「生まれた」を「お産によって産まれたのだ」と具体的な意味に転換し，創造の第二段階を述べる経緯の解釈については第2歌の項で触れた。次歌で歌われる Aditi から Dakṣa が生じる過程も，出産によるものである。「領域・空間」を意味する *ā́śā-* は *rájas-*「領域，空間」と異なり稀な語で，宇宙論や宇宙創造説において積極的な役割を負う語ではない。

4 *bhū́r jajña uttānápado* *bhuvá ā́śā ajāyanta* |
áditer dákṣo ajāyata *dákṣād* $_{u}$*v áditiḥ pári* ||

地が足（足の裏）を上に広げた者から生まれたのだ。

地から（諸々の）領域が生まれた。

Aditi（「無拘束」[21]）から Dakṣa（「能力」）が生まれた。

Dakṣa からは，また，Aditi が。

3cd を受けて，「空間」の中身を具体的に提示する。発生過程の「報告」は基本的に Imperfekt によって述べられているが，4a *jajñe* は唯一の Perfekt である。「産まれて，現在もある」意味の resulativ の機能を想定すべきであろう（確認 Konstatierung の Perf. の可能性もある。Cf. 確認の Aorist *ájaniṣṭa* 5a）。最終的には天・空・地の三界が生まれた筈であるが，先ず始めに地ができ，それから諸空間が生まれたとされる。RV には，神（特に Indra，さらに Varuṇa など）が地を拡げ天を突っ張って支えた，天（と地と）を突っ張って離した，天を支柱で支えた，という表現が多くみられるが（例えば，*stambh^{i}*「力む，力んで突っ張る」，*skambh^{i}*「[支柱で] 支える，突っ張る」の用例の多くを見よ），これらも，天が押し上げられ，地との間に中空が生じた，と解釈すれば，始めに地が生じたという観念に連なる。

ここに新たなテーゼとして提出されるのは，Aditi → Dakṣa → Aditi という発生過程である。「神秘的循環発生」などと称されることもあるが，現実に「卵から鶏が，鶏から卵が」発生する過程（bījāṅkuranyāya「種子と芽の理屈」，cf. GELDNER Kosmogonie [→ 注 1] 5）が考えられていると解釈すべきであろう。つまり，始めの Aditi と Dakṣa から生まれた Aditi とでは代が異なる。第 5 歌以降では，第 2 の Aditi（Dakṣa の娘）から，Āditya 神たち（その末弟がまた Dakṣa）と Mārtāṇḍa が誕生する次第が語られる。第 2 の Aditi と Āditya 神たちの末尾（第 7 番目）に位置する Dakṣa が人に知られる具体的な神であるのに対し，第 1 の *áditi-* と，ここに歌われる *dákṣa-* とは抽象的な存在・原理であり，それぞれ語義通り「無拘束，自由」ないし「能力」を指すと推測される。Dakṣa の兄弟への言及はない。その際，*áditi-*「無拘束（という女）」は，3c と4a に言われる「足の裏を上向きに広げた」母であり，おそらく3b（2d）の原初の *ásat* を具体的に解いたものと考えられる。*dákṣa-*「能力」とは，後に触れる Āditya 神たちの性格から判断して，社会の中で担う，職業的能力・技量を謂うものと推定される。この文脈では，具体的に，祭官のもつ「ことばによる実現力」（*bráhman-*）が1b の「鍛冶屋」の能力に比せられて想定されているものと思われる。さらに，この *dákṣa-*「能力」はものを産み出す「地」（4a）であり，3b（2d）に挙げられた *sát* を具体的に表す。*áditi-* と *dákṣa-* の両概念は交互に出生を繰り返し円環的完結を成す。

A → B → A という一巡の背景には，一度完結した円環は完全なものとして永遠である，

という観念が想定される。例えば，*saṃvatsará-*「一年，一年間」は *vatsará-*「年，一年」[22]の時の巡りの完全な完結を言う語であり，一年の終わりが次の一年の始まりに重ねられて，永遠の時・継続を保証する。[23] Puruṣa-Sūkta（X 90）の有名な Puruṣa → Virāj → Puruṣa という発生過程も同様に理解すべきである。同讃歌中の Puruṣa は代を重ねている。[24] 男性原理 Puruṣa に始まり Puruṣa に完結する X 90に対し，当讃歌 X 72の創造説は，女性原理 Aditi に始まり Aditi で結ばれている。このことは，末子 Dakṣa の役割が末子相続を反映する可能性と相俟って，母系制の存在を背景として語られている可能性を示唆する。Āditya 神たちを巡る神話全体についても，母系の要素が指摘できるように思われる。また，Puruṣa のサイクルと Aditi のサイクルとを Aditi = Virāj という式を導入することによって結合する試みが為されたことについては，注21に触れた。本讃歌には，こうした永遠に継続する円環の観念の他に，始源への回帰という円環的歴史観が見られる。第 9 歌についての項と注34を参照されたい。

5 *áditir hy ájaniṣṭa* *dákṣa yā́ duhitā́ táva* |
tā́ṃ devā́ ánv ajāyanta *bhadrā́ amŕ̥tabandhavaḥ* ||

Aditi は実に生まれたのだ，
Dakṣa よ，君の娘である［Aditi は］。
彼女に引き続き，神々が生まれた。
幸をもたらし，不死を繋累にもつ［神々］が。

ab において，直前の4d に述べられた Dakṣa → Aditi という過程を確認する。発生過程の「報告」は，4a に Perfekt（*bhū́r jajñe*）が用いられる以外，基本的に Imperfekt によって表されているが，ここでは Aorist *ájaniṣṭa* が確認（Konstatierung）の機能で用いられている。この第二代 Aditi から神々が誕生したとされ，これによって，1ab において設定された主題 *devā́nāṃ jā́nā*「神々の（諸々の）誕生・素性」が答えられたことになる。神々は *bhadrá-*「幸いな，幸をもたらす」者たちであり[25]，*amŕ̥tabandhu-*「不死（または不死の者）との繋がり・

(422)

結びつきをもつ（または：…を親類にもつ)」，つまり，不死の種族に属する者たちである[26]。

6 *yád devā adáḥ salilé* *súsaṃrabdhā átiṣṭhata* |
átrā vo nŕ̥tyatām iva *tīvró reṇúr ápāyata* ||

神々よ，君たちが，あの時，(原初の）海の上に，
よく捕まり合いながら立っていた時，
その時，君たちの（または：君たちから）激しい埃（飛沫）が，
踊る者たちの［それの］ように，飛び散っていた[27]。

「神々の誕生・素性」に関する経過は第５歌をもって終わり，次に，現在ある世界とそこにいる神々の誕生の情景についての歌が続く。２-５までの詩の提出者を４人と考えれば，６-９にも同じ４人を想定することができる（→第３歌，第７歌について)。

salilá- は古典期の Skt.などでは「水」を意味するが，Veda 文献では専ら「原初の海」の意味で現れる（→注34)。男性名詞 *reṇú-* は「塵，埃」であるが，海の場合には「飛沫」を意味しよう。これについては，第７歌で検討する。「踊る者たち」とは，次歌に現れる Yati たちと考えるべきである。

7 *yád devā yátayo yáthā* *bhúvanāny ápinvata* |
átrā samudrá ā́ gūḍhám *ā́ sū́ryam ajabhartana* ||

神々よ，君たちが，Yati たちが［した］ように，
諸世界を充満させた時，
その時には，君たちは，海の中に隠されてあった
太陽を，運び出し了えていた。

前の歌の「踊る者たち」を別の詩人が受けて，それは Yati たちのことを言っているのだ，と解いているものと解される。このことは，４人の詩人による「尻取り連歌形式」（→第３歌について）という見解を補強する。*yáti-* の意味するところは不明であるが，[28] 原初の聖仙（*kaví-*，*ṛ́ṣi-*，*víp-*，*vípra-*：→第１歌について）に数えられる者たちの中で，特に *māyā́-*「計算能力，幻力，幻術」[29] の発揮によって知られた者たちと考えられる。

b の *bhúvanān*$_{i}$*y ápinvata*「諸々の生物界・世界を充満させた」は，動詞 *pinva-* の「何か（Instr.）によって何か（Akk.）を満たす，膨らます」の構文から理解すべきである。問題は何によって満たしたか，という点にあるが，詩人は，既に6d に歌われた *reṇú-*，即ち「神々が飛び散らした原初の海の飛沫」を念頭に置いて，これによって「諸々の生物界・世界を充満させた」と接いでいる，と解される。つまり，*reṇú-* は，一般に *márīci-*（f.，普通 Pl.）「光り輝く水（蒸気）の微粒子」（WEBER Indische Studien 9，1865，9 n.1）と呼ばれるものを指すと推測される。*márīci-* は中空に充満し，太陽光線（*raśmí-* m.「革紐，手綱，光線」）の道を通って地から天へと上昇し，雨として地に戻る。万物の生命エネルギーとして，諸世界を循環しながら満たす，光熱を帯びた水の微粒子の起源が，この讃歌によって語られていると考えられる：J. SAKAMOTO-GOTŌ “Das Jenseits und *iṣṭā-pūrtá-* ‘die Wirkung des Geopferten-und-Geschenkten’ in der vedischen Religion”（Indoarisch, Iranisch und die Indogermanistik, 2000, 475–490）476f., Fünf-Feuer-Lehre（→注21）161f. 参照。

cd「その時，君たちは，海の中に隠されてあった太陽を，運び出し了えていた」は *ajabhartana*（動詞 *bhar/bhṛ* の Perfekt から作られた Imperfekt）によって表されている。海の中の太陽は夜の太陽の観念に連なるが，[30] ここでは最初の昼の誕生が意図されていよう。*márīci-* の活動は太陽光の存在を前提とする。

8 *aṣṭáu putrā́so áditer* *yé jātā́s tan*$_{ú}$*vàs pári* |
devā́m̐ úpa práit saptábhiḥ *párā mārtāṇḍám ās*$_{i}$*yat* ||

(424)

Aditiの，からだから生まれた

息子たちは８人［であった］。

彼女は，７人とともに，神々のもとへと去った。

［彼女は］Mārtāṇḍaを捨てた[31]。

Aditi[32]からĀditya神たちが誕生したことを言う。Āditya神（Aditiの息子たち）は７人の神々から成り，インドイラン共通時代に遡る社会制度の神格化を背景に持つ。１-５は決まった序列をもって現れ，７番目のDakṣaも固定されている：１．Varuṇa，２．Mitra，３．Aryamaṇ，４．Bhaga，５．Aṁśa，６．—，７．Dakṣa。それぞれ，王権，契約，部族慣習法，分配，（個人の）取り分，…，能力（個々の職業能力：→第４歌の項）を体現する。[33]

9　*saptábhiḥ putráir áditir*　*úpa práit pūrv$_{i}$yáṃ yugám* |
prajā́yai mr̥tyáve t$_{u}$vat　*púnar mārtāṇḍám ā́bharat* ||

７人の息子たちとともに，Aditiは

原初の代（世）のもとへ去った。

子孫の為に（子孫をもたらすべく），他方また，死の為に（死をもたらすべく），

彼女はMārtāṇḍaを連れ戻した。

最後の第９歌は，8cdを具体的に述べ，8cの「神々のもと」とは，「原初の世・世代」であると「解かれて」（→第７歌について）いる。突き詰めてゆくと，原初の時代を神代（かみよ）の「黄金時代」とする，ある種の円環的史観が背景に想定される。[34]　円環的完結が継続する永遠を意味するという（もう一つの）観念については第4歌についての項参照。

*mārtāṇḍá-*は**mr̥ta-āṇḍa-*「死んだ卵」からのVr̥ddhi派生形で，「死んだ卵（即ち，流産された未成形の肉の塊）から生まれた者」を意味する。この語はSāyaṇa以来一般に「鳥」と解され，太陽と説明されるなどしてきたが，人間の神的祖先のことであり，失敗したお産から人

間が誕生したというこの神話も，Āditya 神たち同様，インドイラン共通時代に遡ること（新アヴェスタ語 *Gaiia- Marətan-*，パフラヴィー *Gayōmart*，原義「死すべき／人の，命」[35]），そして，その神話の詳細が Yajurveda 散文に語られていることを，K. HOFFMANN Münchener Studien zur Sprachwissenschaft 11（1957）85-103 = Aufsätze zur Indoiranistik II（1976）422-438[36] が示した。Maitrāyaṇī Saṁhitā［MS］I 6,12, Kāṭhaka-Saṁhitā［KS］XI 6，Taittirīya-Saṁhitā［TS］VI 5,6，Śatapatha-Brāhmaṇa［ŚB］（Mādhyandina- III 1,3および Kāṇva- IV 1,3），そして井狩発見の新資料 Vādhūla-Śrautasūtra-Anvākhyāna I 4（I 3,1）[37]に見られる各ヴァージョンの詳細な検討は別に発表を予定しているので，散文資料から知られる神話の主たるモティーフを紹介し，創造神話の意味するところを考えるに留めたい。

Aditi が８番目に身ごもった胎児は，二人分（二神分）の体を持ち，優れた存在であった。先に生まれた神々は，彼に支配権を奪われることを恐れ，流産させるように謀る。母の Aditi は流産した子 Mārtāṇḍa（上下左右両方向に等しく人の身長の大きさをもった，成形されていないこね合わせたもの[38]：ŚB）の存続を願い，先に生まれていた神々に懇願する。神々は，彼が自分たちを凌ぐことがないようにという条件で（MS），または，彼らの役に立つという条件で（TS），彼らの一員とする（彼は Vivasvant となり，人間たちの祖先となる）。KS，ŚB では，彼の死んでいた部分を切り離し，生きている部分を救う（死んでいた部分は象となる）話が語られている。

神々が恐れるほどの能力を持った，しかも，球体の存在，ということで想起されるのはプラトーンの Symposion『饗宴 —恋愛について—』に於いて，アリストパネースの語る恋愛起源説中に登場する４手・４脚・２顔１頭（４耳）…の球体の人間である（189d-）。本来，人間はそのような姿（主として，男-女から成る “Androgynos”）をしており，体力優れ驕慢であったが，彼らに手を焼いたオリンポスの神々が，自分たちの役に立つように，二分割して，今日の人の姿と成した。インドにもそのような神話が知られていた（または，考えられた）ことは，Bṛhadāraṇyaka-Upaniṣad I 4の冒頭によって裏付けられる。即ち，Ātman は，原初，男女が抱き合った大きさをもつ人間の姿をしており，自身を二分割して子孫を作った。[39] RV

X 72の創造神話では，生と死，という二つの部分に切り分けられ，Androgynos の場合には男と女とに分割されるが，人間二人分の要素からなる，球形の有能な存在という起源は類似している。[40]

Veda 散文に語られ，インドイラン共通時代に遡ることが確実な，この Mārtāṇḍa の神話を背景に据えることによって，創造讃歌の「子孫の為に，他方また，死の為に，彼女は Mārtāṇḍa を運び戻した・連れ戻した」の意味が明らかになる。「Mārtāṇḍa を連れ戻した」は人類の祖先が地上に生き返ったことを言う。[41]　彼は地上で子孫を残してゆくが，同時に死を免れない。Mārtāṇḍa が救われた時に切り捨てられた部分は死んだ部分であり，これと合一することによって，彼，即ち人は，元の完全な球体に戻る。死は，人の本来の姿への回帰である。また，死との合体の中にこそ，人間が神々の一員となれる鍵が隠されている。創造讃歌 RV X 72は，このような Mārtāṇḍa の神話を前提として，子孫を作ることによって生を維持する人類と，その個体の死の起源とを語って，世界，神々，そして人類の創造とその円環とを見事に締め括っている。

創造讃歌は「謎の歌」の一種であり，最終的解釈はあり得ない。更なる検証と発見への一歩として，翻訳をここに纏めて掲げる：

1　神々の（諸々の）生れを，今，我々は公言しよう，昂揚の中に，
（以下に）言挙げされる（諸々の）讃辞の中に，ひとがもし，（この）後の代（世）に見ることになるならば（または：誰かが後の世に見ることになるように）。

2　bráhmaṇ の主がこれらを鍛冶屋のように溶融（鍛造）した。
神々の原初の代（世）に於いて，非存在から存在が生まれた。

3　神々の最初の代（世）に於いて，非存在から存在が生まれた。
それに引き続き，（諸々の）領域が生まれた。その際，足（足の裏）を上向きに広げた者から。

4　地が足（足の裏）を上に広げた者から生まれたのだ。地から（諸々の）領域が生まれた。
Aditi（「無拘束」）から Dakṣa（「能力」）が生まれた。Dakṣa からは，また，Aditi が。

5　Aditiは実に生まれたのだ，Dakṣaよ，君の娘である［Aditiは］。
彼女に引き続き，神々が生まれた。幸をもたらし，不死を繋累にもつ［神々］が。

6　神々よ，君たちが，あの時，（原初の）海の上に，よく捕まり合いながら立っていた時，
その時，君たちの（または：君たちから）激しい埃（飛沫）が，踊る者たちの［それの］ように，飛び散っていた。

7　神々よ，君たちが，Yatiたちが［した］ように，諸世界を充満させた時，
その時には，君たちは，海の中に隠されてあった太陽を，運び出し了えていた。

8　Aditiの，からだから生まれた息子たちは8人［であった］。
彼女は，7人とともに，神々のもとへと去った。［彼女は］Mārtāṇḍaを捨てた。

9　7人の息子たちとともに，Aditiは原初の代（世）のもとへ去った。
子孫の為に（子孫をもたらすべく），他方また，死の為に（死をもたらすべく），彼女はMārtāṇḍaを連れ戻した。

註

[1] 例えば，OLDENBERG Religion des Veda（[2]1917）277-280，辻直四郎『インド文明の曙』（1967）91-100など参照。更に，GELDNER “Zur Kosmogonie des Rigveda mit besonderer Berücksichtigung des Liedes 10，129”, Universitätsprogramm 1908，Marburg, 5ff.。

[2] *nāsadāsītyam*と呼ばれることが多いが，この呼称の典拠は不明。Anukramaṇīは*bhāvavṛttam*とする。その意味についてはGELDNER Zur Kosmogonie（→注1）12f. 参照（最終的にはZustandsbericht「現状の記述／報告」という訳語を当てている）。.

[3] H. FALK “Die Kosmogonie von RV X 72”, WZKS 38（1994）1-22。これに先だつものとしては，THIEME “Zu RV 10.72”, o-o-pe-ro-si，Fs.Risch（1989）159-175 ＝ Kl.Schr. II（1995）939-955がある。

[4] 同様の場面でKonjunktivの使用は多い。明瞭な例としては：*āśúṃ dadhikrā́ṃ tám u nú ṣṭavāma*「俊足のダディクラーを，彼を，だが今，我々は称えよう」IV 39,1。1人称複数形におけるKonjunktivとInjunktivとの間の判断についてはK. HOFFMANN Der Injunktiv im Veda（1967）254。

[5] 一人称単数においては，InjunktivおよびIndikativにKoinzidenzfall（KOSCHMIEDER－HOFFMANN）の機能が想定されている，cf. HOFFMANN（→注4）251ff.。同所が筆頭に挙げるI 164,26 *tád u ṣú prá vocam*「それ（以上のこと）を私は，また，（ここに）公言（宣言）する」を複数に置き換えれば*prá vocāma*以外の形ではあり得ない。

[6] おそらく＜**ĝn̥h₁-no-*，例えば*śū́na-*＜**k̂uh₁-no-* n.「空，欠乏」参照。Cf. *ā-jā́na-* n.「生まれつき」YS[m]＋。

[7] Cf. GOTŌ “Vasiṣṭha und Varuṇa”（Indoarisch, Iranisch und die Indogermanistik, 2000，147-161）153 n.21。

[8] GOTŌ “R̥gvedisch *vipanyā́-*，*vipanyú-* und *vipanyā́mahe*”, IIJ 32（1989）281-284（当論文に対する

OBERLIES Historische Sprachforschung［旧 KZ］105, 1992, 16f. の反論は論理をなしていない。これを MAYRHOFER Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen II 81［1992］, 558［1995］が引用することは適切さを欠く）, 更に FALK（→注３）2f.（文献の呈示あり）, GOTŌ（→注７）153f.：1.4.1.参照。

9 特に, THIEME Kl.Schr.157ff. の文献学的部分, 更に MAYRHOFER Etym.Wb. s.v.（1993）参照。

10 「実在する, 現実と合致する」, 即ち「実現する」（および, 「常に存在する, 存続する」）：GOTŌ "Zur Lehre Śāṇḍilyas – Zwischen Brāhmaṇa und Upaniṣad –"（Langue, style et structure dans le monde indien. Centenaire de Louis Renou. 1996［1997］, 71-89）76f.（先行版：Śāṇḍilya の教説再考 ーBrāhmaṇa と Upaniṣad との間ー」『今西順吉教授還暦記念論集「インド思想と仏教文化」』, 1996, 860-844： 857f.),「サッティヤ *satyá-*（古インドアーリヤ語「実在」）とウースィア *ὀυσία*（古ギリシャ語「実体」）ーインドの辿った道と辿らなかった道とー」『古典学の再構築・ニューズレター』第9号, 2001年7月, 26-40, 特に33-36。

11 DELBRÜCK Altindische Syntax（1888）561f., 568f., HETTRICH Untersuchungen zur Hypotaxe im Vedischen（1988）の該当各所参照。ヴェーダ散文における同様の例は OERTEL Syntax of the Cases（1926）55ff. に集められている。

12 THIEME（→注３）160は, 知覚動詞の構文中で, 疑問代名詞に代わって用いられる関係代名詞を想定し,「誰が／誰かが, 後の（我々の）代に, 見ることができるか［を試す為に］」と訳している："[um zu sehen,] wer sie [oder: 'ob einer sie'（die Ursprünge）] in einem späteren（d.h. 'unseren'）Zeitalter zu schauen vermag"。"vermag" を用いるのは GELDNER も同じであるが, Konjunktiv の翻訳には不的確である。

13 Pāda a は一音節不足している。THIEME（→注３）168 n.17は *etā́ tā́* と補い, FALK（→注３）5は *etaā́* と語末の *ā́* を二音節に読んでいる。前者は語順の点でも RV の伝承の点でも考えがたく, 後者は中性複数の代名詞の語末（Ausgang）が二音節になる動機も類例も知られないことから採りがたい。OLDENBERG Noten z.St. のように "unterzählig" としておくべきである。*etā́* は何れにしても中性複数と考えられるが（例えば, 3音節の Instrumental *etaā́* というような形は知られていない）, その指示内容については, 本文で触れる（→注17）。

14 'zusammenschweißen'：RAU Metalle und Metallgeräte im vedischen Indien（1974）28。各翻訳も同様：GRASSMANN, GELDNER, KRICK（Feuergründung 283）, THIEME（→注3："schmiedeten zusammen"）。

15 パーリ語 *san-dhamati*, *san-dhanta-* は, 仏典（AN, MN）で明瞭にこの意味で用いられている：J. SAKAMOTO-GOTO Münchener Studien zur Sprachwissenschaft 44（1985, Festgabe K. Hoffmann I）174-176。FALK（→注３）5は X 81,3（→次頁に引用）の解釈に基づいてこの見解をとり, "schmolz zusammen" と訳している。LUDWIG II（1876）576も同様の訳を示す（"hat zusammen geschmolzen", cf. V 442）。動詞 *dhmā* /*dham*ⁱ「吹く, 吹きかける, 風を送る」が溶融・金属精錬を意味するのは, 鞴（ふいご）を使うこと（普通は革袋 *dṛ́ti-* を用いる。本文に引く X 81,3をも参照）から来ている。*saṃ-dhmā* /*dham*ⁱ の解釈には, 更に,「溶融によって,［ものを］構成して（*sam*）作る」という可能性もある。このような意味の *sam* については, 例えば *saṃ-skar/skr̥*「（ものを）構成して（構成要素をしかるべき位置に配置して）作り上げる」（cf. 後藤敏文「サッティヤとウースィア」［→注10］37f.）参照。

16 *nir-vap*「（祭式用のパンケーキを作る為の玄米・大麦を必要な分だけ）取り分ける」→「（パンケーキを）

準備して［，焼き上げ，… 分割して …］献供する」，*ā-labh*「（犠牲獣を）掴まえる」→「（犠牲獣に）［犠牲祭の一連の行為を加えて］献供する」，*yavám karṣ/kr̥ṣ*「大麦を耕作する」：畝を引く［，種蒔きをする，… 収穫する］，*vájram sec/sic*「ヴァジュラ（棍棒）を，（溶かした鉄を鉄床の上に）注ぎ［鍛造する］」など。GOTŌ "Funktionen des Akkusativs und Rektionsarten des Verbums"（Indogermanische Syntax, Wiesbaden 2002，21-42）40f. 参照。

17 *jā́nā* と取る：Sāyaṇa，CHARPENTIER，H.-P. SCHMIDT，BRERETON，VARENNE（詳しくは FALK 5 n.14），更に，HILLEBRANDT，STRUNK Anusantatyai（Fs.Narten, 2000）259；— *yugā́ni*：KRICK，FALK；— "diese Welten"：GELDNER，LUDWIG，GRASSMANN（"dies All"），SCHROEDER，DEUSSEN（HILLEBRANDT Lieder des R̥gveda 129 n.2による），N. BROWN India and Indology 47（JAOS 1965），THIEME（→注13："Dinge hier［die Welt］"）；— 天と地（Du. と取る）RENOU EVP XVI 142，N. BROWN（共に可能性として指摘）。

18 創造讃歌 X 81（Viśvakarmaṇ）について，以下の本文を見よ。VAN BUITENEN *"Vācārambhaṇam"*, Indian Linguistics 16（1955）157-162は Chāndogya-Upaniṣad VI に繰り返し現れる *vācārambhaṇaṃ vikāro nāmadheyam* を *vikāro* の後で文を区切り，およそ「個物はことばに始まる」程の意味に解して，古代インドにおける「ことばによる創造」の観念に触れている（更に IIJ 2，1958，295-305，KUIPER IIJ 1，1957，155-159，IIJ 2，306-310に議論が続いた）。しかし，この文は「変様（変容物）はことばによる捕捉（把握）であり，名付けである。（『土』だけが真実在［*satya-*］である）」と解釈すべきであり，創造説を直接問題としているようには思われない：後藤敏文「*vācārambhaṇaṃ vikāro nāmadheyam*」『インド思想史研究』6（服部正明博士退官記念論集），1989，141-154。VAN BUITENEN は，同論文において（特に159 f.），RV の創造讃歌 X 81，X 72にも言及しているが，漠然とした参照にとどまっている感がある。更に，N. BROWN "The creative role of the Goddess Vāc in the R̥g Veda", Pratidānam，Fs.Kuiper（1968）393-397＝India and Indology（1978）75-78参照。

19 THIEME（→注３）160ff. が主張するような「論争」が描かれているのではない。THIEME は７人の論争者を仮定し，最終第９歌を Siddhānta の見解（定説）と解釈する。FALK 18f. は複数の詩人による連作の構造（"concatenatio"）自体には明確に言及している。因みに，相手の歌の後半部を前半に引いて，後半にこれに対置して自説を述べる論争形式の歌が Setaketu-Jātaka（No.377）G. 4-6＝Uddālaka-Jātaka（No. 487）G. 2-4に見られる（cf. SCHNEIDER IIJ 7，1963/1964，162）。

20 *uttānā́-* の用例は，FALK が確認する通り，「その面を上に向けた，上向きに拡げた」と解釈すべきものが殆どである。しかし，*uttānā́-hasta-*（アヴェスタ *ustāna-zasta-*）はギリシャ語 *χεῖρας ἀνασκών*，ラテン語 *palmas tendens* と共通の，敬意を表す時の古い風習を引くものと考えるべきであり（KAEGI Der Rigveda，²1881，183 n.173，後藤『印度學佛教學研究』39，978；仏教の施無畏印 abhaya-mudrā にまで連なる可能性も考えられる），その際，掌が水平方向に拡げられて上を向いているか，指先が上（または外へ）向けられているか，ということは語形・語義の問題とは関わらない。*uttānā́-* は，元来は名詞（Nom.ag.）で「外へ広がる，開く（もの）」を意味したが（AiG II-2 727; < **tonó-*），VAdj. と再解釈され，語根 *tan* に二次的な seṭ 語形（Pass. *tāyáte* など）をもたらした，と考えられる，cf. *pūrṇá-* :: *pūryáte* ＝ *tānā́-* :: *x*。

21 *áditi-* は「無拘束，自由」，就中「罪からの自由」と解されている，特に BRERETON The R̥gvedic Ādityas（1981）196ff. 参照。この種の複合語の場合，アクセント位置によってその種類を決定することは事実上で

きないが（cf. AiG II-1 231, 293, LIEBERT *-ti-* 117 などを参照），原則的にはKarmadhāraya複合語「非拘束」を示唆するかと思われる。しかし，神名，個人名に多く見られる，Vokativを介しての語頭へのアクセント移動（KURYŁOWICZ Étud. indoeur. 182,192, Idg.Gramm. II 92f., HOFFMANN Aufs. 23, THIEME Kl.Schr. 1054ff., GOTŌ Gs. Kuryłowicz 370 n.15）を考慮すれば，本来のアクセント位置がどこにあったとしても，Bahuvrīhi複合語「結びつき・拘束をもたない」から導くこともできる。この語とアヴェスタの女神Anāhitāが語義的に関連することについてはGOTŌ Vasiṣṭha und Varuṇa（→注7）160f.参照：即ち，*anāhitā-*は，これまで「汚れのない」と解釈されてきたが，「縛られていない，自由な」を意味する。更に，OETTINGER "Die Benennungsmotiv der iranischen Göttin *Anāhitā*（mit einer Bemerkung zu vedisch Aditi）", Münchener Studien zur Sprachwissenschaft 61（2001）163-167, KELLENS "Le problème avec Anāhitā", Orientalia Suecana 51-52（2002-2003）317-326参照。「無拘束」である女神Aditiは「（群の制約を超えて）自由に歩き回る牝牛」という観念のもとに，もう一つの女性原理であるVirājと同置されるに至る（RV VIII 101,15等），cf. J. SAKAMOTO-GOTŌ "Zur Entstehung der Fünf-Feuer-Lehre des Königs Janaka", Kultur, Recht und Politik in muslimischen Gesellschaft I, Akten des 27. DOT, 2001, 161f. n.12。

[22] *vatsará-*は*vatsá-*とともに印欧祖語の中性名詞**u̯ét-es-*「年」に遡る。*vatsá-*「仔牛」はその年に生まれた当歳の牛の意味で，次の年の仔牛が生まれるまでの期間が一年であったことになる。牛の妊娠期間は10ヶ月であり，毎年決まった時期に仔牛が生まれるように配慮されていたことが伺われる，cf. AB IV 14,1 *saṃvatsare-saṃvatsare vai retaḥ siktaṃ jāyate*「一年が経つごとに，retasは，注がれると，生まれるのだ」。更にcf. *parivatsará-*「満一年間」。

[23] この観念が明瞭に述べられる例として，Br.後期の例からではあるがŚB XI 1,2,12を挙げることができる：*mártyā ha vā́ ágre devā́ āsuḥ.* | *sá yadàivá té saṃvatsarám āpúr áthāmṛ́tā āsuḥ. sárvaṃ vái saṃvatsaráḥ. sárvaṃ vā́ akṣayyám. eténo hāsyākṣayyám sukṛtám bhavaty akṣayyó lokáḥ*「神々は，始めは，死すべき者たちであったのだ。それが，彼らが一年間に到達するや否や，すると［その瞬間から］彼らは不死であった。一年間は完全なものなのだ。完全なものは不滅なのだ。このことによって，また，つまり，彼によってなされた善い行為（*iṣṭāpūrtá-*「祭式と布施の効力」）は不滅になる，［彼の死後の］世界は不滅に［なる］」（Dākṣāyaṇa「Dakṣaの行程」という特別な新・満月祭を行うことによって，15年間で30年間分，即ち360回［～一年間］の新月祭と満月祭とを達成することになる，と理由づける文脈），更にcf. XII 1,2,3, XII 1,3,22。一年間が連鎖の一つの環を完結させることについてはcf. JB II 307:9＝II 410:3 *saṃvatsaraḥ kṛtsnam annādyaṃ pacati*「一年間は食物を全て（残り無く）熟させる」，AB IV 13-15（繰り返し*svasti saṃvatsarasya pāram aśnute*「無事，一年間の向こう岸に到達する」手段が語られる。注22をも参照のこと。AB JBともにMahāvrataに関するbrāhmaṇaの箇所）。

[24] 第1のPuruṣaと第2のPuruṣa，および，両者をつなぐVirājとの関係をどのように解釈するか，という問題は，Vedaの神学者たちの間で議論されていたものと思われる。その解答の一つが，例えば，Janaka王の5火説（ŚB XI 6,2,6-10）の中に見られることをJ. SAKAMOTO-GOTŌ Fünf-Feuer-Lehre（→注21）162:§3.1., 167:§5.が指摘している。

[25] *bhadrá-*の語義についてはOLDENBERG Kl.Schr. 843ff.参照。

[26] THIEME（→注3）171は*amṛ́tabandhu-*を"deren Ursprung das Leben ist"と訳し，*bándhu-*を「臍・起源への結びつき」，即ち，家系の起源・由来（"Verbindung zum Nabel / Ursprung", d.h. der

genealogische Ursprung）と注釈する。FALK は更に一歩を進め，「不死の者，即ち水たち，の中に臍の緒をもつ」と解している。FALK の指摘する RV X 95,18b *mr̥tyúbandhu-*（FALK によれば「臍の緒によって死に結びついている」：地上の王 Purūravas のこと）は明瞭な対概念であるが，*bándhu-* を「臍の緒」と取るよりも，他の用例一般に倣い「結びつき」，しかも「親族，親類，一族」の意味に取り，「不死を親類にもつ」を「不死の一族に属する」の比喩的表現と考える方が自然であろう。

27 *ápāyata* および現在語幹 *áya-* については，GOTŌ Die “I. Präsensklasse” im Vedischen（1987，²1996）92参照。

28 Cf. MAYRHOFER Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen II s.v.（1994），JAMISON The Ravenous Hyenas and the Wounded Sun（1991）54-57（祭官・学者の族名の一と解する説を支持）。

29 後藤『インドの夢・インドの愛』（1994）21 n.7参照。

30 GOTŌ Vasiṣṭha und Varuṇa（→注７），特に151ff. 参照。

31 *párā as* については HOFFMANN Aufs. 431 n.29，更に GOTŌ Anusantatyai（Fs.Narten, 2000）84 n.17参照。

32 *áditi-* については注21参照。

33 特に，BRERETON The R̥gvedic Ādityas（1981），GOTŌ Vasiṣṭha und Varuṇa（→注７）159ff. 参照。固定されていないもう一つの神（当然自由に使える６番目に入ると思われる）としては，Indra, Savitar, Marut たちなどが挙げられる（cf. BRERETON 2）。社会制度上の重要概念が神として表象されている背景には，祭官階級が「文書」（ことば）を専ら管理していたという社会のあり方が想定される（GOTŌ 159）。

34 後の Br̥hadāraṇyaka-Upaniṣad IV 3,32 *salila eko draṣṭādvaito bhavati* | *eṣa brahmalokaḥ samrāṭ* も同様の意味で解すべきかと思われる。即ち，アクセントの伝承されている Mādhyandina 版（IV 3,31）では *salilá éko draṣṭā́dvaito. bhávati*（｜）*eṣá brahmalokáḥ samrāṭ* となっており，定動詞 *bhávati* にアクセントのあることから，これが文頭に当たると解釈される（daṇḍa は学習用の，一種の pratīka であり，文の切れ目とは関係ない）：「（原初の）海（cf. 本稿第６歌）においては，見る主体は唯一であり，相対性をもちません（唯一存在します）。なるのです（／現れるのです，値するのです），これ（原初の海）がブラフマンの世界に（／として），大王よ」。

35 *marətan-* は aav. *marəta-*（<**martá-*），*maṣ̌a-*（= ved. *márta-*）「死すべき者」から individualisierendes Suffix（特化の接尾辞）*-n-* によって作られた語形である，cf. HOFFMANN Münchener Studien zur Sprachwissenschaft 6（1955）36 ＝ Aufsätze 379。

36 英訳版：German Scholars on India, II（1976）100-117 ＝ Aufs. III（1992）715-735。FALK（→注３）15-18が述べる所は，HOFFMANN の論文とヴェーダ散文の原典との正確な理解に基づいておらず，理解し難い内容である。

37 Y. IKARI “A Survey of the New Manuscripts of the Vādhūla School － MSS. of K1 and K4－”（Zinbun 33, 1998 [1999], 1-30）25f.。

38 *saṃ-deghá-*：cf. *deha-*「肉体」（ただし，Veda 語には無し，Āraṇyaka ＋）。

39 A. GÖTZE “Eine orphisch-arische Parallele”, Zeitschrift für Buddhismus 4（1922）170-175, cf. HOFFMANN Aufs. 436 n.35。

40 原実「慈心力」（『国際仏教大学院大学研究紀要』3, 2000, 9-47）12は，仏典の Vesāli 建設神話（パーリ注釈文献と漢訳善見律毘婆沙）から，バーラーナスィーの第一王妃が肉塊（*maṃsa-peśī-*）を産む話を紹介

している。箱詰めにされ，川に流された肉塊は苦行者に拾われ，やがて黄金の男子と女子とになる。同論文は，他の肉塊誕生譚にも言及している。Puruṣa-Sūktaでは，最初のプルシャについて「人（Puruṣa）は（幾）千の頭を持ち，千眼であり，千の足をもつ。彼は地をあらゆる場所で覆い，十指分はみ出して立っていた」と歌われるが（RV X 90,1），原初の超能力体という意味に限れば，同じ観念に連なる方向性のものと解される。更に，Viśvakarmaṇについて，第2歌についての項参照。(『西西蔵石窟遺跡』中国・四川連合大学［霍巍，李永憲］，チベット自治区文物管理委員会，頼富本宏監修。集英社 1997，p.76 図149［cf. 解説 p.115：奥山直司］にAndrogynosを思わせる壁画が紹介されている。単なる見世物の一シーンに過ぎないかもしれないが，この絵の背景を検討する価値があるかと思われる。)

[41] Puruṣaの場合には地上に再び生じた（*abhavat*）：RV X90,4 *tripā́d ūrdhvá úd ait púruṣaḥ* | *pā́do 'syehā́bhavat púnaḥ*「Puruṣaは，三足（4分の3）をもって，上へ向かって出て行った。彼の一足（4分の1）はここ（地上）に再び生じた」。

（東北大学大学院教授）

富へと Matsya（魚）たちは，（神経を）尖らせていた［が］，［消え］入ったかのようである。

Bhr̥gu たちと Dahyu（だまし好き）たちは，服従をなした。

分かれ行く（潰え去る）［両軍］において，仲間は仲間を［乗り］越えた。

puroḍā́s　Nom.

7　　*ā́ pakthā́so bhalānā́so bhananta*　　– – – –| ∪ – ∪　– ∪ – ∪

　　-ālinā́so viṣāṇínaḥ śivā́saḥ |　　– ∪ – –| ∪ – ∪　– ∪ – –

　　ā́ yó 'nayat sadhamā́ ā́r̥yasya　　– – ∪ –| ∪ ∪ –　– ∪ – ∪

　　gavyā́ tŕ̥tsubhyo ajagan yudhā́ nŕ̥̄n ||　　– – – – –| ∪ ∪　– ∪ – –

Paktha（調理）たち，Bhalāna たちは，［自らを］［幸をもたらす者たちと］語った（称した）。

Alina たち，Viṣāṇin（角ある者）たちは，［自らを］幸をもたらす者たちと［語った（称した）］。

Ārya とともに酔う［同盟者］，［軍勢を］率いてきた者（Indra）は，

牛を欲して，Tr̥tsu たちのために，戦を機に，男たちのもとへ，出向いていた（戦に駆り出した）。

bhananta: *ₐbhananta* とも。*'nayata*: *nayat* とも。　*sadhamā́s*　*sadhamā́d-* の Nom.？

ajagan : Perf.の過去。

8　　*durādhyò áditiṃ srevā́yanto*　　∪ – ∪ –| ∪ ∪ –　– ∪ – –

　　ₐ'cetáso ví jagr̥bhre páruṣṇīm |　　∪ – ∪ –| ∪ ∪ ∪　– ∪ – –

　　mahnā́vivyak pr̥thivī́m pátyamānaḥ　　– – – –　| ∪ ∪ –　– ∪ – –

　　paśúṣ kavír aśayac cā́yamānaḥ ||　　∪ – ∪ –| ∪ ∪ –　– ∪ – –

悪い意図を持つ［彼ら］は，Aditi を流産させつつ（Aditi の掟を守らず），

［良］識なく，Paruṣṇī［川］を分断確保していた。

偉大さ（力）を操りつつ，彼（Indra）は，大地を 包摂した。

犠牲獣として，［自らを］見者と見なしている者は横たわっていた。

avivyak / *vivyak*　？ (c)Puruṣa を思わせる。(d) 敵勢が Vr̥tra と懸けられているか。

9　　*īyúr ártham ná nyarthám páruṣṇīm*　　– – – –　| – ∪ –　– ∪ – –

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　(– – – – –　| ∪ –　– ∪ – –)

　　āśúś canéd abhipitvám jagāma |　　– – ∪ –　| ∪ ∪ –　– ∪ – ∪

　　sudā́sa índraḥ sutúkām̐ amítrān　　∪ – ∪ – –| ∪ ∪　– ∪ – –

　　árandhayan mā́nuṣe vádhrivācaḥ ||　　∪ – ∪ –| – ∪ –　– ∪ – –

［彼らは］目的地に（至るかのように），のように，（実は）陥りに行った，Paruṣṇī［川］に。

素早い者でさえも，団欒（家で食事に向かうこと）に 赴かなかった。

Sudās へと Indra は...な 敵（非同盟者）たちを

屈服させた，Mānuṣa（の地）において（人間たち［の世界］において トモ），去勢された（牛たちの

ような者の）ことばをもつ者たちを。

人類と死の起源 ―リグヴェーダ 創造讃歌 X 72―

1　神々の（諸々の）生れを，今，我々は
公言したい，昂揚の中に，
（以下に）言挙げされる（諸々の）讃辞の中に，
ひとがもし，（この）後の代（世）に見ることになるならば。
（または：誰かが後の世に見ることになるように）

2　bráhmaṇ の主がこれらを
鍛冶屋のように溶融（鍛造）した。
神々の原初の代（世）に於いて，
非存在から存在が生まれた。

3　神々の最初の代（世）に於いて，
非存在から存在が生まれた。
それに引き続き，（諸々の）領域（*áśās*）が生まれた。
その際，足（足の裏）を上向きに広げた者から。

4　地が足（足の裏）を上に広げた者から生まれたのだ。
地から（諸々の）（諸々の）領域が生まれた。
Aditi（「無拘束」）からDakṣa（「能力」） が生まれた。
Dakṣa からは，また，Aditi が。

5　Aditi は実に生まれたのだ。
Dakṣaよ，おまえの娘として。
彼女に引き続き，神々が生まれた。
幸を齎し，不死を繋累にもつ［神々］が。

6　神々よ，おまえたちが，あの時，（原初の）海の上に，
よく捕まり合いながら立っていた時，
その時，おまえたちの（または：おまえたちから）激しい埃（飛沫）が，
踊る者たちの［それの］ように，飛び散っていた。

7　神々よ，おまえたちが，Yati たちが［した］ように，
諸世界を充満させた時，
その時には，おまえたちは，海の中に隠されてあった太陽を，
運び出し了えていた。

8　Aditi の，からだから生まれた
息子たちは8人［であった］。
彼女は，7人とともに，神々のもとへと去った。
［彼女は］Mārtāṇḍa を捨てた。

9　7人の息子たちとともに，Aditi は
原初の代（世）のもとへ去った。
子孫の為に（子孫を齎すべく），他方また，死の為に（死を齎すべく），
彼女は Mārtāṇḍa を連れ戻した。

創造讃歌 RV X 129

1．非存在は無かった；存在も無かった；その時には。
空間（領域，*rájas*）は無かった。その上の天の蓋いも無かった。
何が動き回っていたのか？ どこを？ 誰の庇護の下に？
水気はなんであったのか，深い深みは？

2．死は無かった；不死は無かった；その頃には。
夜の（そして）昼の徴標は無かった。
かの唯一物が風もなく，ひとりでに（自らの決定で）息をしていた。
それ以外には更に何も無かったのだ。

3．暗闇が暗闇に包み隠されて，初めにあった。
徴標の無い（原初の）海がこの一切であった（一切を支配していた）。
空虚によって閉じ込められていた，発現しつつ（空で）あったもの，
それが熱力の偉大さにより唯一物として生まれてきた。

4．欲求が初めにその上に転現した，
思考の第一の精子であったところの。
存在の繋累を非存在の中に見つけ出した，
見者たちは心臓の中に思考をめぐらして捜し求めた後で。

5．彼らの（思考の）革紐（手綱，または太陽光線）は水平に張られていた。
下の方はいったいあったのか？，上の方はいったいあったのか？
精子を置く者たちがあった。偉大さたちがあった。
自決力（自律力）は下の側に，賦与は上の側に。

retodhā́ āsan mahimā́na āsan　　svadhā́ avásāt práyatiḥ parástāt

6．誰がこうだと知っているのか？ 誰がここで明言するのか？
どこから生じ来たったのか，この（世界の）創出は？
神々はこれ（世界）の創出によってこちら側に［存在するのだ］。
それなら誰が知っているのか，どこから（世界が）生じて来たのかを？

7．この創出がどこから生じてきたのか（を），
それは（誰かによって）決定されたものか，あるいはそうでないのか（を），
最も上の天の蓋いにあってこのことを見張る者があれば，その者こそが知る，
あるいは（彼も）また知らない。